

秀作

高齢社会で生きていく

福岡県・福岡県立八幡高等学校 2年 渡邊 悦子

今年の春高校2年生になった私は、近頃社会問題へと、目を向けるようになって来た。そこで私が目にとめたのは、「高齢化」の問題である。

世界一の長寿国——日本。現在、わが国の高齢化のスピードは、世界にも例をみない速さで進行しており、最も高齢化が進んだ国となっている。その背景には、平均寿命がのびたことや、出生率が低下して少子化が進んだことが挙げられる。では、高齢化が進むことでこれからの社会にどのような影響があるのだろうか。その答えとして、若者への負担が挙げられる。労働力の面で考えればこのような答えになるかも知れない。しかし、子供から高齢者まですべての人々が共存する中で、労働力の問題だけでは解決できない。それでは、若者の私達はどうやって高齢者を支え、高齢者はどう社会と関わっていけばよいのだろうか。

高齢化に伴う問題は様々であり、かつ山積み状態である。医療・介護などの福祉問題、生活費などにも大に関わる年金問題、また、精神的な問題もあるだろう。こうした問題からも、高齢者が心身ともに元気に過ごせる社会作りは非常に難しいことであると感じる。だからこそ、私達一人一人が社会の一員として真剣に考えなければならないのだ。

心身の健康。私は高齢者にとっての心の健康とは何かを考えてみた。一人孤独に一日中

家にとじこもっている高齢者。地域の活動や趣味に没頭する高齢者。どちらが輝いて見えるだろう。誰もが後者を選ぶのではないだろうか。

私の祖母は私の自宅近くに住んでいる。週末ともなると、私の母や私と一緒に買い物へ出かけたり映画を見に出かけたりする。そんな時の祖母はとても楽しそうで幸せそうな顔をしている。そこで私は祖母に「一番幸せと思う時はいつか。」と聞いてみた。すると祖母は、「みんなと一緒に買い物したり、お喋りしてる時だよ。」と言っていた。これを聞いて私は分かった。高齢者の心の健康とは身近な人と関わることである。つまりこれが人生の幸せな時なのだ。

仕事を引退した高齢者が人と関わるができる社会とは、高齢者が能力を最大限に発揮でき、生きがいを持つことができる社会だと思う。その中でも、それまでの生活スタイルを持続し、尊厳のある人生を過ごしていくことが大切なのではないか。そのためには高齢者を他人と考えず、将来の自分だと考えノーマライゼーションなどの取り組みをする必要がある。

ある日私は母に、祖母にした質問と同じ質問をしてみた。すると母は、「家族みんなでいる時だよ。」と答えた。そして私は自分にもこの質問をしてみた。——母と同じ答えだった。私は歳の違う3人に同じ質問をして分かった。人

の幸せとは歳に関わらずみんな同じなのだ。幸せと言っても人それぞれで、様々であるが、そこには必ず「人」が関わっている。やはり人は人と関わっている時が一番幸せなのだ。

人と人とのつながり——これはとても難しい問題である。しかし、この問題については年齢、性別を問わず誰もが考え、一緒に解決できる問題なのである。高齢者だから——、子供だから——、男だから——、女だから——といった問題ではない。誰もが全ての人を一人の人間、他人としてではなく、関わりある人間と考えることができたなら、私は必ず解決できる問題だと思っている。

挨拶を交わすこと、ありがとう、ごめんなさいと言うこと、笑顔を生み出すこと。社会と関わり、人と関わるとはこのように、とてもささいなものであると思う。形ではなく、心で向き合うことだ。お金で買うことのできない、かけがえのないものなのである。

こんなささいなことが町中で、社会全体でできたなら、どんなに素晴らしいだろう。高

齢者を心で支え、笑顔で支え、そうして私達若者も支えられる。

若者、高齢者にとって本当の幸せは何かと改めて考えてみた。案外答えは簡単なようだった。やはり両者共に幸せと感ずるのは、互いの関わりがある中で心身共に元気なことであろう。医療・年金問題など、私達には難しい問題がほとんどだが、それ以前の問題である心の健康は私達にも考えることができる。いや、考えるだけではなく、私達が大人になる前に、解決し始めなければならない問題であって、かつ、一生考え続けなければならない問題であろう。そのためには、高齢者を遠い存在として見るのではなく、将来の自分と考えるべきだ。そうして、高齢者を自分の身近な人と見るべきだ。そうすれば両者の間には、優しさ、思いやり、笑顔といったものが現れるだろう。これは決してお金では買えない貴重なものだ。尊いものだ。私は将来の自分のとも思える高齢者達の幸せを、今心から応援している。

